2 月第 2 週の礼拝説教

■日　時：2024 年 2 月 4 日（日）10：30～11：30　降誕節第 6 主日礼拝
（創立記念日）

■説　教：　保科けい子牧師

■聖　書：新約：フィリピの信徒への手紙 4 章 10～20 節（新約 p366～367）

■説教題：「　わたしを強めてくださる方のお陰で　」

■讃美歌：12「とうときわが神よ、くらぶるものなき主よ、」
390「　主は教会の　基となり、」

本日は立川教会創立 73 周年を記念して、主日礼拝をささげています。週報の右のページにも載せておきましたが、立川教会は 1951 年 2 月 11 日（日曜日）日に最初の礼拝を守っています。そういうわけで、本日は立川教会の誕生日ということもできると思います。73 年の間に、江口忠八牧師から始まり、私が八代目の牧師になりました。私自身が立川という町の名前に出会ったのは、松本清張の『ゼロの焦点』という推理小説を読んでいた時でした。正直なところ、立川という町に対してあまり良い印象は持てませんでした。江口先生ご夫妻が柴崎町から現在の立川教会が立っている錦町に移ろうとお考えになったのも、第二次大戦後の立川駅の近くはあまり風紀が良くなかったからである、ということをどなたかからお聞きしたように思います。それから 70 年を経て、本日も立川教会では主日礼拝がささげられています。主なる神様の変わらざる導きとお支えを深く感謝しながら、いつでも新しい歩みへと押し出されてまいりたいと思います。

さて、本日の聖書箇所ですが、2 月初めに日本基督教団の聖書日課を確認していたら、フィリピの信徒への手紙 4 章 10 節から 20 節が取り上げられており、とてもうれしくなりました。なぜなら、フィリピ教会は使徒パウロが第二次宣教旅行で初めてヨーロッパ大陸に渡り、マケドニア州のフィリピというローマの植民都市で、紫布を商う人で、神をあがめるリディアという婦人と出会い、彼女に福音を語ることによって彼女も家族の者も洗礼を受け、婦人たちを中心にしてフィリピ教会の基礎ができていったということを思い出したからです。このことについては、使徒言行録 16 章 11 節から 15 節に記されています。その箇所で、フィリピ教会の成り立ち考えながら、私たちの立川教会の成り立ちとこれまでの歩みを重ね合わせて考え、感謝することができました。

フィリピの信徒への手紙は獄中書簡とも言われています。使徒パウロはその伝道生活の中で何度も捕らえられ、牢獄の中から教会に宛てて手紙を書いています。そのような状況なのに、この手紙は「喜びの手紙」とも呼ばれています。それは、「喜び」という言葉が名詞や動詞の形で 10 数回も用いられているからです。そして、この手紙はフィ

リピの教会だけでなく、その後、回し文のようにして多くの教会で読まれ続けてきました。そのたびに主イエス・キリストの恵みを伝え、教会に集う人々の信仰を励まし、本当の「喜び」を伝えてきたのです。そして、二千年後の今でも、わたしたちの教会にも届けられています。

ところで、フィリピの信徒への手紙は、もともとは現在の形の1通の手紙があったわけではなく、フィリピの信徒たちに送った3通の手紙をまとめたものであると考えられています。使徒パウロは、繰り返しフィリピの人々に手紙を送ったのです。そこには、パウロと教会の深い結びつきが感じられます。現代では、手紙を書くというよりは、メールやラインなどの通信手段が簡単に用いられるようになり、瞬時に世界中のどこにいても、コミュニケーションがはかれるようになりました。確かに便利ですが、心を込めて思いを伝えたい時には、やはり手紙やはがきという手段を用いて、時には何通も書き送るのではないでしょうか。フィリピの信徒への手紙4章10節に「**さて、あなたがたがわたしへの心遣いを、ついにまた表してくれたことを、わたしは主において非常に喜びました。今までは思いはあっても、それを表す機会がなかったのでしょう**」とあります。「わたしへの心遣い」と言われているのは、具体的にはフィリピ教会の人たちが、牢屋にいるパウロの身を案じて皆で物資やお金を集め、エパフロディトに託して届けたことを指しています。この心遣いによって、パウロは随分助けられたようです。パウロが牢屋の中にあっても命を長らえ、方々の教会に手紙を書くことができたのは、このような支えがあったからだと思われます。パウロにしてみれば、本当に有り難いという気持ちだったに違いありません。4章10節以下20節まで、パウロの感謝の気持ちがよく表れた文面になっています。しかし、直接に感謝を表す「ありがとう」「感謝します」という言葉が見当たらないのです。ですから、この箇所は昔から「感謝なき感謝の言葉」と言われてきたようです。けれども、フィリピの信徒への手紙の全体を見渡しますと、「感謝」という言葉は1章3節に記されていますし、それ以後、何度も出てきます。直前の4章6節には、パウロはフィリピ教会の人たちに向かって、「**何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい**」と勧めていました。フィリピ教会の人たちには「感謝しなさい」と勧めておきながら、パウロ自身は多くの支援によって助けてもらったことへの「感謝します」というお礼の言葉が聞かれないのは不思議だと、語る人もいます。

そこで注意したいのは、使徒パウロの勧める感謝する対象は誰かということです。それを記しているのが、10節の「**わたしは主において非常に喜びました**」という言葉です。それは、フィリピ教会の人々のパウロへの心遣いが表されたことを、何よりも「**主において**」喜んでいるという深い感謝の言葉になっているのです。もちろん、パウロがフィリピ教会の人たちと人間的に親しくなっていたからこそ、親身になって多くの心遣

いが届けられたのかもしれません。しかし、それだけではないのです。互いに「主において」というところで一致しているがゆえに、深い信頼によって互いに歩んでいることが確信できるのです。13節、14節を読んでみます。「13 わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です。14 それにしても、あなたがたは、よくわたしと苦しみを共にしてくれました。」とあります。このことを砕いてみますと、「今、私は牢屋に捕らわれて不自由で困難な中にあります。けれども、主イエス・キリストが共に歩んでいてくださり、強めていてくださいます。だから、そのお陰ですべてのことが可能なのですよ。」「あなたがたも、本当に私と苦しみを共にしてくれました。だから、あなたがたもまた主によって強められ、すべてのことが可能になりますよ。」と語っているのだと思います。主が共にいてくださる、互いの根底にあるこのことを確認するときに、互いに主によって強められ支えあっている主にある交わりがここに成立しているのです。私たちの立川教会の歩みも、立川教会に連なるお互いの歩みも、「主において」強められることを信じて進んでまいりましょう。